『来て飲みなさい。』ヨハネ7:37-39

7:37 祭の終りの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。
7:38 わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」。
7:39 これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。すなわち、イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下っていなかったのである。

●主題
Ⅰ．それは渇く人への招きです
Ⅱ．それは信じる者の祝福です
Ⅲ．それはキリストが重視する祝福です

●序論
何事にも順番がある。それはわたしたちの一般的な常識の中にもあります。
聖書の世界がまたそうです。イエス・キリストの生涯もまたそうです。
イエスさまはこの地上に人としてお生まれ下さり、全き神でありながら、人と全く同じになられ、この地上でその教えと御業を明らかにし、人に捨てられ十字架につけられ死なれました。墓に葬られ、そして復活され、人々に証し、そして天に上げられたと。先ほど使徒信条で告白した通りです。
誕生無くして、十字架はなく、十字架なくして復活はありません。当り前ですが、大切なことです。　同様に今日のところで
:39 これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。すなわち、イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下っていなかったのである。

「栄光」それは今お話したイエスさまの経験です。それら無くして御霊は下らなかったことがわかります。
《紹介本　「聖霊のバプテスマの恵み」～愛と証しの力に満たされて～》
さあ、わたしたち信じる者が受けると言われている聖霊。それはイエスさまの招きから始まっていることを今日見ています。イエスさまはこう表現されました。
「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。」と。

●本論
Ⅰ．それは渇く人への招きです
この祭りはユダヤ人たちの祭りのひとつで、昔モーセによって出エジプトした民が荒野を旅した天幕（テント）暮らしを覚える祭りです。その荒野での食料も水もすべて、神が与えて下さったことを思い起こす祭りでした。
　　祭りの意味は、移動する民と家畜を、神が顧み、その必要を満たされたことを思い

起こし、あらためて神への信仰を深めることでした。
そんな祭りの最後の日は、シロアムの井戸から水を汲み祭壇の上に注ぐということで、クライマックスを迎える時でした。だから「大事な日」と表現されます。

その時、イエスさまは立って叫んだのです。
7:37 祭の終りの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。
この招きは、この祭りにふさわしい大切な招きでした。
あの荒野で、神の恵みと養いのみが、民にとっての命の糧であった。彼らには何もなくても、神の臨在がともにあり、神が顧みてくださることの経験を重ねて歩んだのです。
そのことを踏まえた上で、イエスさまはこの祭りで叫ばれたのです。
「だれでも渇く者よ！」と。

ここでわたしたちは、神さまの恵みに、イエス・キリストご自身に、その言葉に、渇く者であるでしょうか？　それがこのところで2つ目のことです。
4章のスカルの井戸のそばでのサマリヤの女との対話を思い起こしてください。
彼女はのどの渇きの必要から、井戸に水を汲みに来ていました。
しかしイエスさまとの対話を通して、自分自身の魂の渇きに気づき、このイエスさまを信じることで受ける命の水に目を向けることができるようになったのです。
4:13-14 イエスは女に答えて言われた、「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。
しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」。
イエスさまは彼女を招き、気づきを与えた。彼女の人生は大きく変えられました。

ところで、もしかしたら、まことの神から遠ざかって生きる現代の文化や社会の中では、わたしたちもまた、渇きに気づけないでいる鈍さを持っていることはないだろうか…、そう問われるのです。
それを他のもので埋めようと懸命に働き、求めているのですが、神に求めていないことに気づいていない。

「魂の渇き」に気づかせていただくことは大切です。それと同時にその満たしをだれに求めるべきかを知ることは大切です。
荒野で民が経験した、神に頼り神から満たしていただく経験へ今日招かれています。

Ⅱ．それは信じる者の祝福です
7:38 わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」。

この言葉は、まさに先のサマリヤの女に語られた言葉そのものですね。
イエス・キリストは、だれに対しても、すべての人に対して「わたしのもとに来なさい」「わたしを信じなさい」と、いのちの水の祝福へと招いてくださっています。

わたしたちは恵まれた招きに耳を傾けているのです。
あのサマリヤの女性は、世間的な評判は決して良いものではありませんでした。むしろ悪い。そんな彼女は、人々との交わりからも遠ざけられ、そして礼拝からも遠ざけられていたかと思います。
しかしキリストとの出会いを通して、その状況一変しました。
一つは、礼拝への招きを経験しているのです。
4:23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまこととをもって父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。
彼女は、自分の礼拝できる場所がないことを暗に言葉にしていたからです。
彼女が「キリストと呼ばれるメシアが来られたならば、すべてが明らかになる」ことを口にした時、イエスさまはそれにお答えになりました。
4:26 イエスは女に言われた、「あなたと話をしているこのわたしが、それである」。
ここに渇く者がいて、そしてキリストとの出会いがあって、彼女は生ける水を内にいただく経験へと導かれているのです。
いや内にいただくばかりではなく、それが「腹から生ける水が川となって流れ出る」という経験に至る。
4:28-29 この女は水がめをそのままそこに置いて町に行き、人々に言った、「わたしのしたことを何もかも、言いあてた人がいます。さあ、見にきてごらんなさい。もしかしたら、この人がキリストかも知れません」。

そうしてこの町の人たちはイエスさまを信じるようになっていったのです。
水はただそこにいる人を潤すにとどまらない、「腹から生ける水となって流れ出る」という、それは周囲をも潤す経験となることを覚えましょう。
改めてイエスさまは、「わたしを信じる者は」と言われたのです。

Ⅲ．それは聖書が語る聖霊の祝福です
7:38 わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、･･･

大切なことです。イエスさまは聖書から逸脱して、御自身の言葉を主張されることはありませんでした。聖書の真理を人々に解き明かし伝えていたのです。
この仮庵の祭りの最後にイエスさまが立ち上がって叫ばれた内容もそうです。
イザヤ12:2-
:2 見よ、神はわが救である。わたしは信頼して恐れることはない。主なる神はわが力、わが歌であり、わが救となられたからである」。
:3 あなたがたは喜びをもって、救の井戸から水をくむ。

:4 その日、あなたがたは言う、「主に感謝せよ。そのみ名を呼べ。そのみわざを
もろもろの民の中につたえよ。そのみ名のあがむべきことを語りつげよ。

だからここでイエスさまは、今日「わたしのところに来て飲むがよい」「わたしを信じる者は…」と生ける水をいただく祝福へと招きの言葉を叫んでいるのです。
そして最後にそれはやがて信じる者が受けるべき聖霊の祝福だと証しします。

7:39 これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。すなわち、イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下っていなかったのである。

イエスさまが十字架と復活そして天に帰り、栄光を受けて、御霊が注がれたのです。
そして今、わたしたちは信じる人々として聖霊を受け取る者とされています。
忘れてはならないこと、イエスさまが「わたしを信じる者は、聖書に書いてある通り、」と言われたことです。その生ける水は聖霊を指していると。

先ほど紹介した小冊子の一文を少しだけ紹介します。小題「注意すべきこと」

ただし、ここで二つの注意が必要です。「ペンテコステ信仰は、聖書に書かれていることは今も起こると期待する信仰」と書きました。
第一に、聖書を基準し、…わたしたちが見るあらゆることを、「聖書に書かれているかどうかを吟味し、聖書に書かれていないことが中心にならないように注しなければなりません。
もう一つはあくまでも神さまに「期待する」のであって、自分の願望が神さまの主権を飛び越えないようにしなくてはなりません。…主権は神さまにあるからです。

そして

（その上で）神さまに期待しないのも間違いです。主が求めなさいと命じておられるのですから期待して求めていく、それが…わたしたちの信仰の土台ではないでしょうか。

さいごに）

今日お聞きしたイエスさまの招きの言葉は大切です。
そしてわたしたちは、この言葉をもって、また聖霊の力を受けてさらに周囲の人たちを招くことができる者とされていることををおべましょう。

「だれでも渇く者は、イエスさまのもとに来て命の水を飲むことができます！」と。